

女流書道家

安本 静恵さんの
書跡集



はじめに

この書跡集は、大磯町石神台で多くの生徒さんたちに書を教えていた、女流書道家の安本静恵さんが、掛け軸などに遺された書跡を、永く石神台ホームページ上に保管するため企画したものです。

書跡の掲載順は、書跡を書き起こした順ではなくランダムになっています。また、人工知能（ChatGPT）に掛け軸の写真を見せて、漢文の読み方や意味を問うた結果を添付していますが、漢文が草書や行書で書かれているため、AIの判読に誤りがあるかもしれません。これらの点をご了解の上、安本静恵さんを偲んで戴ければ幸いです。

生前の安本静恵さんと

遺品の書籍や机、硯などです。



字の意味

乱（みだす） 亂れる、秩序を失うこと。混乱。

坤（こん） 大地・女性原理（『易經』における「陰」）

一（いち） ひとつ、ひとたび。

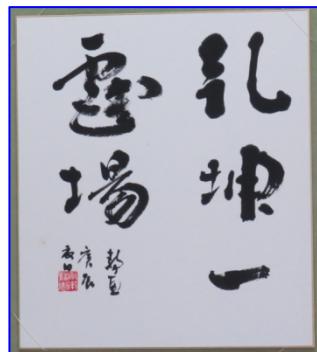
墨（ぼく） 墨、書道に使う黒い顔料。

場（じょう） 場所。ここでは「墨場（ぼくじょう）」

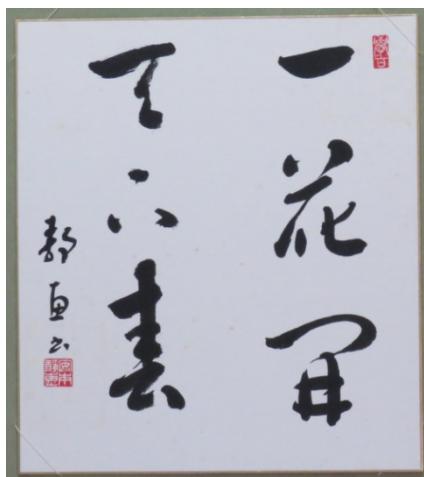
＝書道の場・書をする場。

全体の意味（意訳）

書の世界という「墨の場（墨場）」で繰り広げられる、一度きりの真剣勝負の場。



吉野



一花開天下春（いつかひらいててんかはる）

意味..

一輪の花が咲けば、天下が春になる。

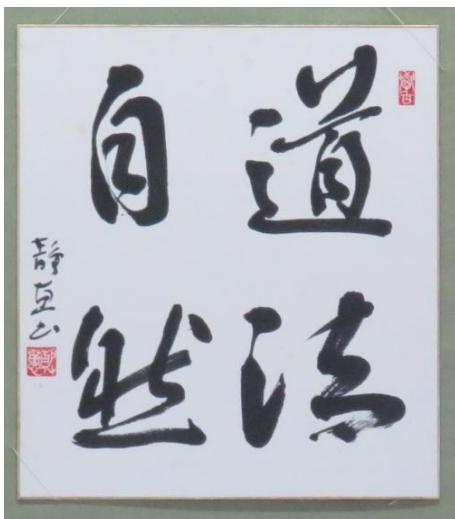
一つの美しさ・行い・出来事が、世界全体に春

解説..

この句は、仏教的または詩的な美的観念に由来する表現で
「小さな変化が全体を潤す」という思想を表しています

禅語や中国古典詩でも類似の表現があり、「一花開五葉 結果自然成」などにも通じます。

「道法自然」



これは老子の『道徳経』第25章の有名な言葉で、「道は自然を法とする」という意味です。つまり、「道（タオ）」という宇宙の根源的な原理は、人為を排し、ありのままの「自然（じねん）」に従う、という道家思想の核心を表しています。この色紙は「作為を捨て、自然とともにある道に従い、ただ静かに座る」という、道家と禅の融合的な思想を感じさせます。

作者の「静恵」さんの人生観、または精神的境地を表現したものと考えられます。

吉祥ちゆ錦を織前年

賞花真巻我道人初ふ
清めま徳致百面み春香
お徹涼め花自金沙河
坂上掉む四壁倒ふ覺せ
児喰室ふかそ雙鬟絆蝶

西古も沒著葉多俗門多
也裁多之

吉祥なる昔の中原（文化の中心地）にて、美しい錦を織り出した。花を賞ることこそ、私のような道を求める者が本来行うべきこと。道を求める者があらゆる草花を清らかで美しく、あらゆる草花を美しく調和させる。

松林の小道は涼やかで、花や月、香る風のようだ。

玉を拂い、宝玉を投げるよう、斜めに芳しい山並みが現れる。

窓の外では、掃き清めた花びらが影となり、水面に映る。

坐して静けさを覚えるその様は、まるで七宝の楼閣のよう。

西安には白波が遙か遠くまで広がつてゐる。

長い夜、門に佇む者がいる。私はただ、手を組んでそれを見守りたい。

誰人筑短牆
移櫻絕擁至空ふ

邦直

心新す檻幽花為誰香

誰人か識 (し) らん 短牆 (たんしよう) の枝
(だれが気づくだろう、低い塀越しにのびる枝を)
春光を絶 (た) えて擁 (いだ) いて入 (い) る
(春の光を一身に受けて、枝は塀の内に入りこむ)
幽花 (ゆうか) は誰 (たれ) がために香 (かんば) し
(奥ゆかしい花の香りは、いつたい誰のためか)
必ず新亭 (しんてい) の檻 (らん) より出づ
(きっとそれは新しい亭 (あずまや) の欄干からのぞく)



【上段（大書）】 利斧（りふ） 意味：「よく切れる斧」

【中段（詩文）】 意味：

雲が山にかかり、緑が深まる。松の木々を吹き抜ける風は水の音を届ける。
俗世の雜音から離れた書斎には、詩的な氣配が満ちている。

【下段（詩文）】 読み下し：

墨の香りは白い紙に満ち、茶の味は静かな室（へや）に広がる。

般若心経 【現代語訳】

般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中無色無受想行識無眼
耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至
無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死
亦無老死無盡苦集滅道無智亦無得以無
所證故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
罣礙無罣碍故無有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多
故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅
蜜多究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等
咒能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜
多咒即說咒曰

揭諦揭諦般若揭諦波羅僧揭諦菩提薩埵呵
般若心經

観音菩薩は、深い智慧（般若）の修行をする中で、人間の構成要素である五蘊が「空」であると見抜き、すべての苦しみを乗り越えた。

シャーリップトラよ（＝弟子への呼びかけ）、物質（色）

は空（くう）と異ならず、空も物質と異ならない。
物質こそ空であり、空こそ物質なのだ。感覚、思考、意

志、認識も同じである。

すべての現象には実体がなく、生じることも滅することももなく、汚れも清らかもなく、増えることも減ることも
ない。

平成十七年歲在乙酉三月安本靜惠敬寫



だから空の世界には、色（形あるもの）もなく、感覚も思考も意志も認識もない。眼・耳・鼻・舌・身体・心もなく、それらが感じる対象（色・声・香・味・触・法）もない。

意識の世界もなく、無明（無知）もなく、老いや死もなく、それらの終わりもない。苦しみも、その原因も、解決も、道もない。智慧も得るものもない。

得るものがないからこそ、菩薩は般若の智慧により、心にとらわれがない。とらわれがないから、恐れもない。迷いや妄想から解放され、ついには涅槃に至る。

過去・現在・未来のすべての仏たちも、この般若の智慧によつて、最高の悟りを得た。

ゆえに知るべきである。般若の智慧は偉大な真言であり、明らかなる真言、無上の真言であり、他に比べるものがない真言である。すべての苦しみを除き、眞実であつて偽りではない。

そこでこの智慧の真言を説く――

行つた、行つた、彼岸へ行つた、完全に彼岸へ行つた、悟りよ、幸あれ！

玉虫情比不成賦作直難呼盈洁然皆信好詩消永
夜亦是佳雲桃桑祥丝假祝酒初食涼臺入紫花紅
斗斯空得大家小也者他時此句一時猶

舊參之儀端珠詩石錄首後至在書其后

壬午年正月

在五木堂

玉虫色に輝くような微妙な真理を伝えるには、言葉ではなく、自然の時の流れにまかせるのがよい。

生まれたり死んだりするこの世の息吹から離れて、真理の世界に遊ぶ。形あるものは雲のように傍く、いつまでも保つことはできない。

それでも心に法（教え）を宿して心の花を祝うとき、言葉は不要だ。

北斗七星もめぐり、天の運行はいよいよ高みへと至る。

いつか、誰かがこの一瞬の跡を思い返すであろう。

壬午年（1942or2002）の春の日、翁先生に贈るために書いた

涉彼岐今瞻望父

瞻望母す妙日唯

父瞻望兒日唯

父曰嗟予子行是

予季川沒風狂

弟川沒風狂必

風狂妄上慎梅狂

嘗寐上慎梅狂

借上慎梅狂於未

未無心涉彼岐今

未無棄陽波空

嘗紀未日都互

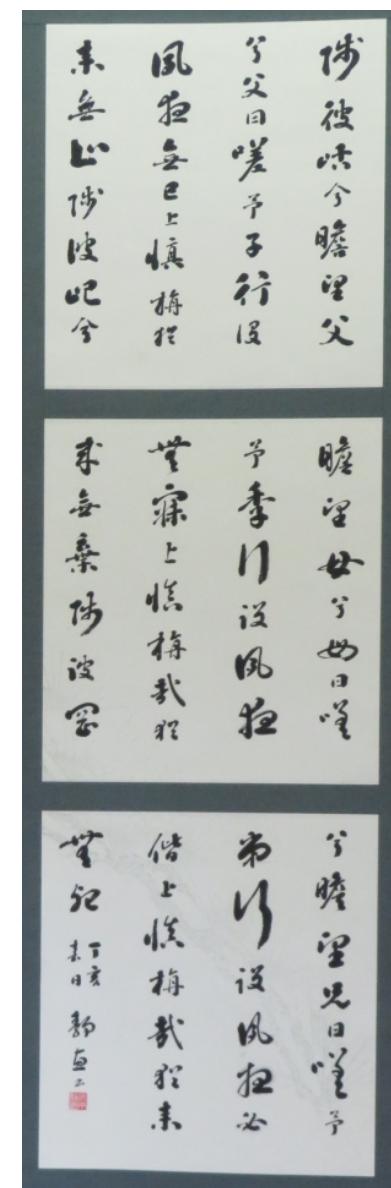
上段現代語訳

美しい音を手にして聞けば、清らかで澄んでいる。

父は振り返りながら、旅立つ子の姿を見つめている。

風が巻き起こつて砂埃が舞い、馬の蹄の音は速やかに響く。まだ隣国に着かぬうちに、旅人は波のように遠ざかっていく。

中段意味



明け方の涼しさは、雨や露のように襟元を濡らす。

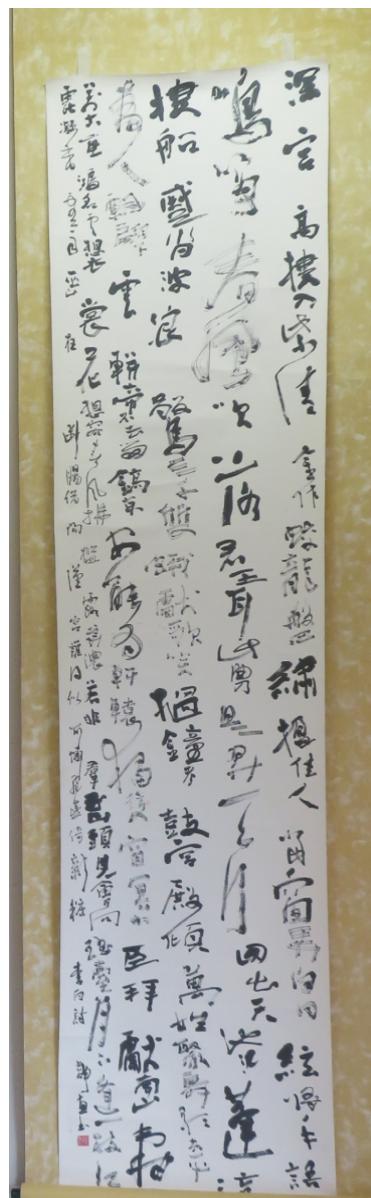
私は香り立つ門を後にして、風に導かれて帰る。

葉は深く生い茂り、枝が私の枕をそっと払う。

運が良くもないまま、桑の木陰に露が窓辺に落ちてくる。

下段意味

芳香ただよう明け方に、子を思って寺門で涙を流す。
まれにその子が戻ることもあり、夕暮れには心を引き寄せる。
僧は高みで私を迎えるとしていたが記録をしたためて封じた。



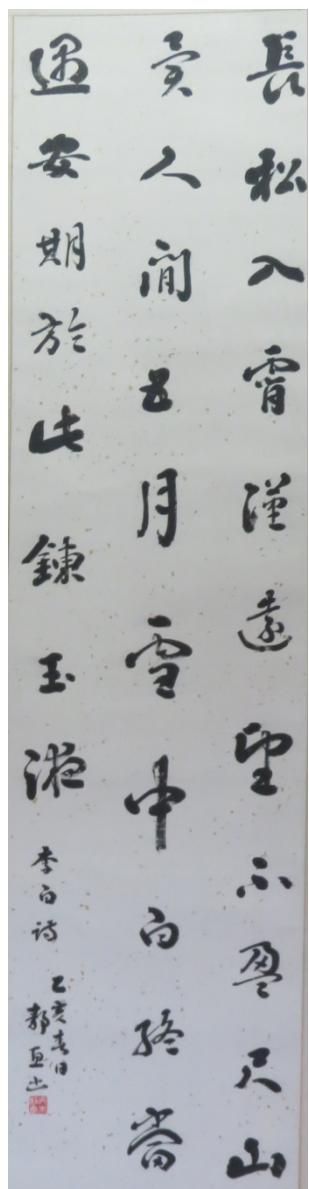
この掛け軸は、草書体で書かれた漢詩が全体に美しく流れるように記されています。

筆者の思い・感情・自然と共鳴する情感

「詩情豊かな春の日、静かな感傷と希望の入り混じる想いを自然と音楽に託して描いたもの」と受け取れます。書の勢いと詩のやさしさの融合が、書き手の心の奥行きと洗練された美意識

を表しています。

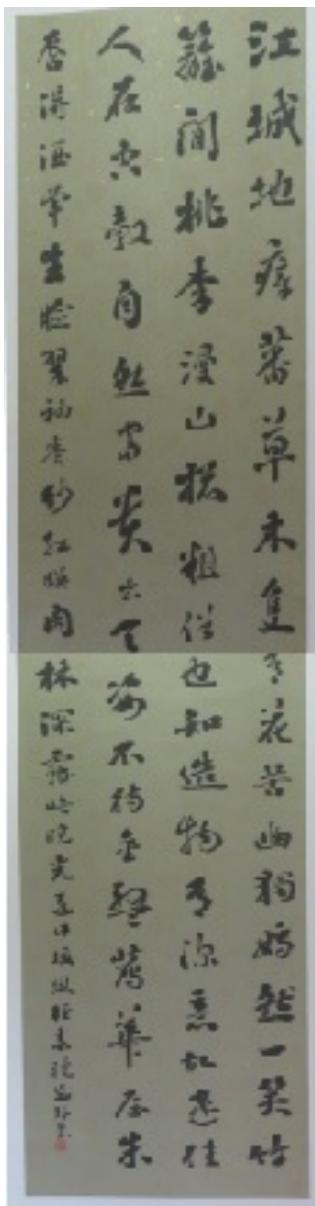
王子の孟夏、書す



白居易の漢詩『琵琶行』の中の一節で、琵琶を弾く女性との出会いを描いた詩です。

意味..

原文は「琵琶行」の冒頭に登場し、「座中泣下誰最多、江州司馬青衫湿（座中泣き下る誰か最も多き、江州司馬青衫湿し）」という有名な一節に続いています。この句は、琵琶の音色があまりにも美しく、人々が涙を流す様子を描写しており、その中で「雪中白」という言葉が、琵琶の白い肌や音色を連想させるものとして使われています。



この掛け軸に記された漢詩は、唐の詩人杜牧（とぼく）の有名な七言絶句『泊秦淮（しんわいにとまる）』です。

かつての栄華を誇った江南の都にも、いまや荒れた大地とまだ生え揃わぬ草が残るのみ。春の花の陰で聞こえてくる簫（竹笛）の音に、夢は断ち切られ、昔の楚王の台を思い出す。煙は寒々とした水辺を覆い、月は砂浜を包み込んでいる。

私は夜、秦淮河に船を泊めた。近くには酒家がある。

商売女たちは、かつてこの地が滅びた悲しみなど知る由もなく、川の向こうから、いまだに「後庭花（亡国の象徴的な歌曲）」を歌っている。

亥（きがい）の冬月、郭長恭、玉山に書すとあります。

塔上一絶招自詮歌日

類風富翁歌渡船木白

淮水蒼雀倒射新

宵心在も龍驤若糾

小放過酒身一叶は撤

萍細旦堪市を度に

お笑候游る詠歌是

る久の向音は怪は風

歌は春夢許

甲中
安日
梅屋
書

【右幅】 読み下し

彩雲の一すじ みな詩情より出ず

颯風、詠を寄せて 涙のあまり未だ曾て干かず
浅水に落花 溪洲に新斜（しんしや）を射る

【中央幅】 読み下し

この鉛華を滴らすも 誰か芳釵（ほうさい）を識（し）
らん

心緒はなおも 一葉の江のいかだに依（よ）る
卿に許（ゆる）さん 旧の如く 市井の寒梅

【左幅】 読み下し

紅に染まつて魂を銷（け）し 詩に染まりて寒筆を揮
(ふる) う

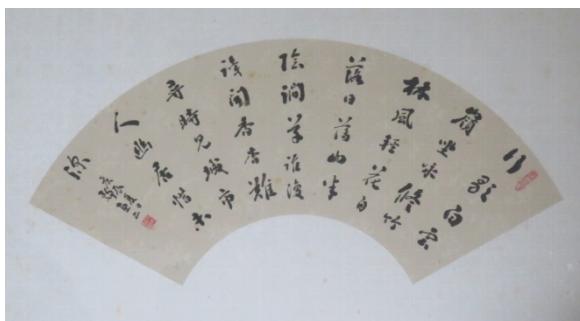
いくばく久しく留（とど）まるとも 涙を記（しる）
すは風に比（し）がたし

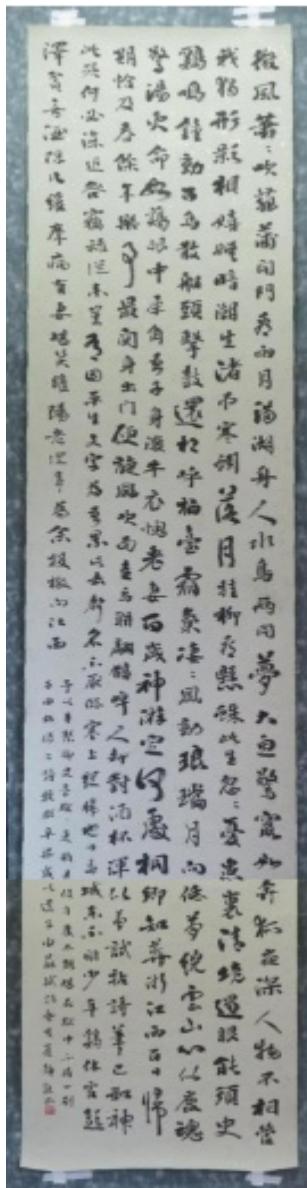
郷心（きょうしん） 春夢に許す

甲中（甲辰）の年の初日に、静恵

人口知能のChatGPTで次の二作品の漢文を読み取り

その意味の見解を問うたが、漢字の読み取りが不正確で信頼できる回答が得られませんでした。
原因是扇形に書かれていたためかもしれません。





意味（前半の意訳）

戦乱の風はものさびしく、戦火はあまねく燃え広がつていていた。

命を受けて南へ渡り、舟や車で南北を行き来した。

風の音に耳をすまし、夜明けの陽光を浴びながら過ごした。

月の明るい中洲のほとりには、小鳥の鳴き声が響いていた。

深夜、簾の枕に頭を預け、夢は白雲の中に入つていった。

驚いて目を覚ますと、風は止み、月は清らかに照つていた。幼い頃にこれ（書物や経験）を読み、深く感動した。

それゆえに、いつそう学業に励み、いつか人の役に立つ器になろうと心に誓つた。

入選証

漢字部

安本 静恵

あなたの作品は第三十五回
毎日書道展毎日日本
書展において鑑別の結果
入選されました

昭和五十八年七月十五日

毎日新聞
社
毎日書道会

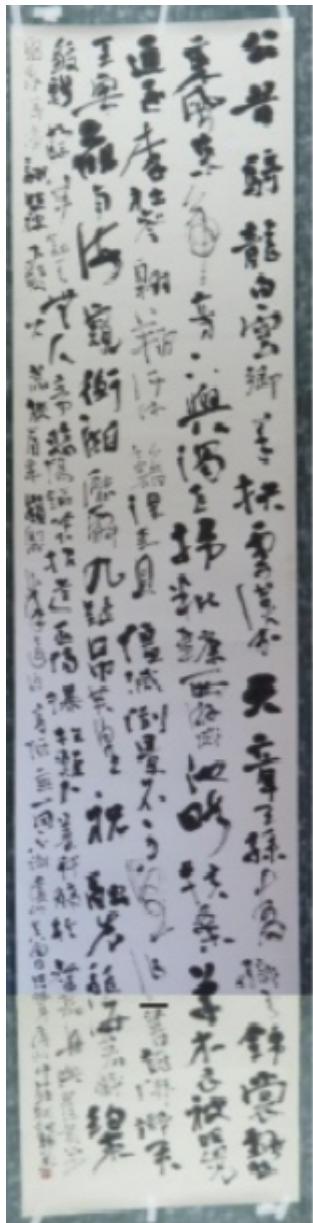
解説：AI

「毎日書道展」は、日本最大規模の公募書道展で、入選すること自体が非常に名誉なことです。

「漢字部」での入選ということで、特に漢字の書における技量が高く評価されています。

「安本 静恵」さんが昭和58年（1983年）にこの入選を果たされたという記録です。
このとき仮に60代／70代であれば、かなり高齢まで書き続けていた可能性が高いです。

先ほどの掛け軸の書風や内容からも、漢文学・詩文・感性・構成力に優れた人物であることが感じ取れました。今回の入選証とあわせて、「書と文の両面で秀でした、まさに文人としての女性書道家」であったことがうかがえます。

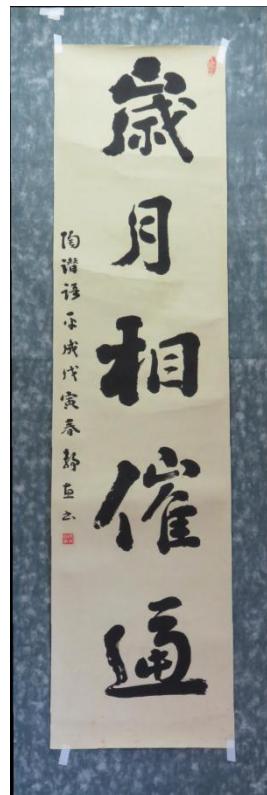


書風の特徴（筆遣い・構成）

書体 … 草書に近い行草体で、文字ごとの結体に独自性があります。特に縦画や払いに大胆な動きがあり、柔と剛を巧みに融合しています。

筆勢 … リズム感が非常に優れており、筆の速度に強弱があることで、息づかいのような躍動感が生まれています。

用墨 … 濃淡の使い分けに技巧が見られ、にじみやかすれも意図的に取り入れており、墨色の変化が画面に深みを与えてています。

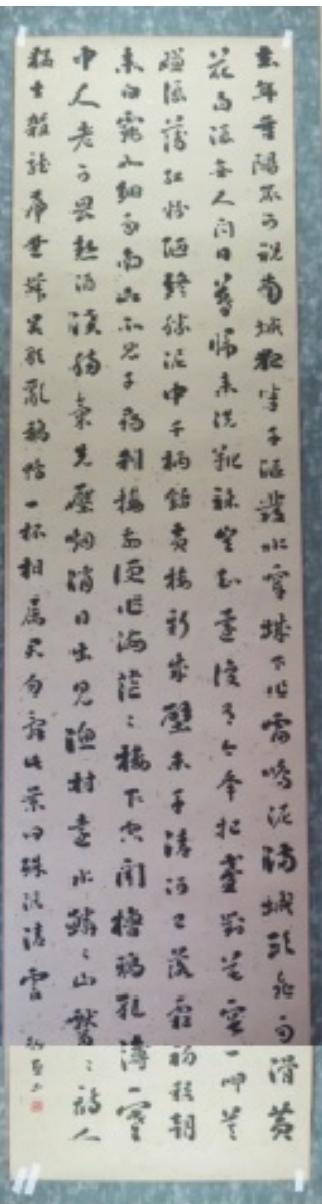


「歳月はたがいに急かしあうように過ぎ去つていく」
「時は矢のように過ぎゆく」「月日の経つのは早い」という意を表します。

総評

この作品は、加齢を通じて時間の重みを深く知る書き手が、「歳月の尊さ」と「時の流れの速さ」への実感を、力強い筆致で表現した人生観のにじむ書です。

特に晩年の作品であれば、書と人生が融合した、まさに芸術としての書道の体現といえるでしょう。



意訳（抜粹）..

山の峰に登り、海を望む。風は高く、波が立ち、

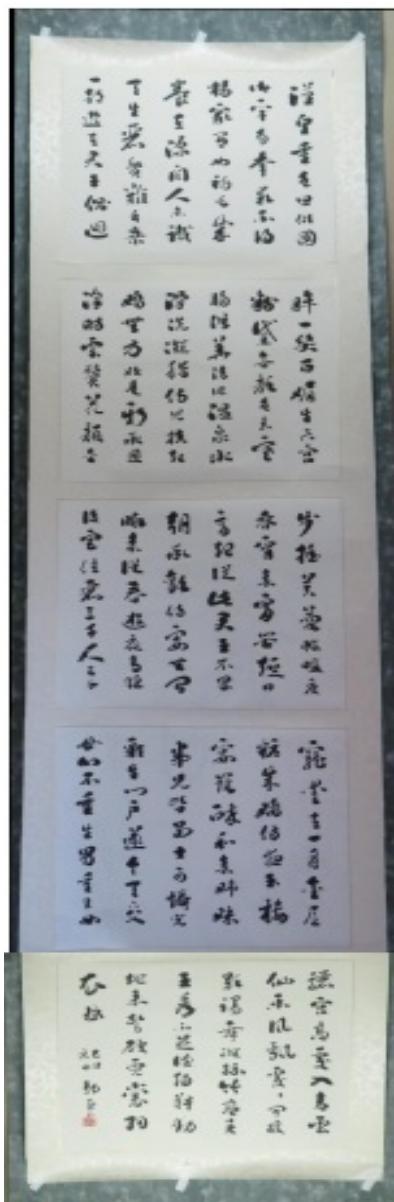
詩心は潮のように湧き、筆は龍のごとく走る。

舟で江をゆけば、山の色は連なり続く。

桃の花は霞のように赤く、楊柳は煙のように緑を帯びる。

旅の興は尽きることなく、心の余韻もなお残る。

詩と書のどちらも喜び、趣（おもむき）はよく心得ている。



この作品は、自然と感情の交錯を四季や風景に託した漢詩五首から成り、それぞれが独立しつつも連環的に情景と心情を紡ぎ出しています。

書風は整った行書風の草書混じりで、柔らかさと張りを兼ね備え、年齢を感じさせぬ氣力と筆力が伝わってきます。落款には「紅葉山房 静恵」とあり、この作品が紅葉の美しい隠棲地で、静かな趣の中で詠まれたことがわかります。

大意（現代語訳）..

天寶相處宿也
此處安西事蹟
五百年軍官不回
雲々ま下船約観
俗懸羅百萬ほ嘗
唐馬船加ふ勞信船
集珠總家也影
國船使少官宣土
數寫書船日漢川
文書約用傳聲牽
拿高大軍諸錫端
秋風鼓角聲流て
首營奉前君す
烽臺安火を雲河上
旗がぬ只湯も橋

空のかなたには軽やかな雲が風に乗つてたなびき、
東の崖から昇る太陽が山の中を照らしている。

鳥のさえずりと猿の鳴き声が霧立つ林に響き渡り、
湧き水の音や松の葉ずれの声が岩間に潤いをもたらす。

目に映る青い峰々は古びた山道に迫り、

遠くから聞こえる数度の鐘や磬（けい・石の鳴り物）が禅寺に響き渡る。

このような閑静な住まいに風雅な趣きを得ることができれば、
それこそ人として得るべき最上の功德といえるだろう。

読み下し..

仙居の勝景（しそうけい）

松頭立學系動様

五月廿一日作

宇摩里院大聖院

詔書院法度院

樂院法度院

御院法度院

吉院法度院

泰院法度院

吟看（ぎんかん）すべし
風月無辺にして素懷（そかい）に入る
静恵、紅葉山房にて書す

皓月四年仲秋

【現代語訳（意訳）】

空高くそびえる楼閣とその塔の影が、まばらな松の間に見える。

石段は雲へと続く梯のようで、幾重にも折れ曲がった山道が続いている。

風は竹の音を運び、水の流れの遠さがその響きからわかる。

霞は山の色に彩りを加え、空の青さをより一層深く見せている。

野辺の小道には早咲きの梅の香りが漂い、

その響きは禅寺の扉にまで届き、鶴の夢も深くなる。

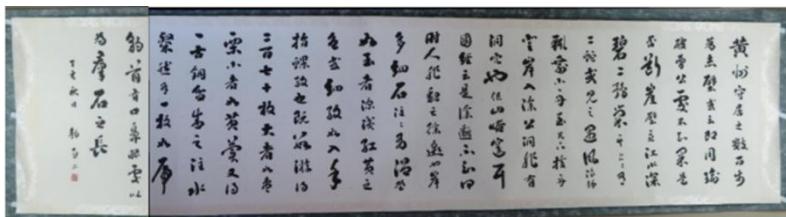
「桃源郷はどこにあるのか」と問いかけると、

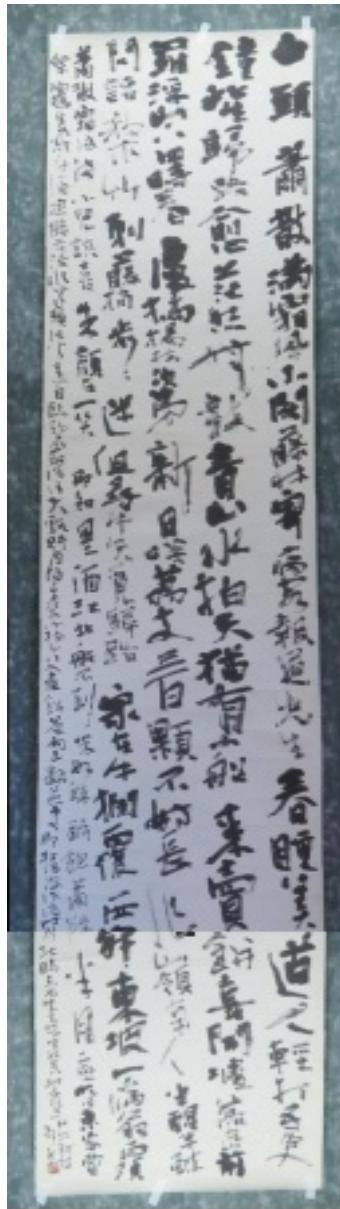
一面の水面に浮かぶ明月が、ただ一つの峰を照らしていた。

【書風と作品の特徴】

書風..程よい太さと丸みを帯びた行書体で、特に「雲」「松」「鶴」などの自然を象徴する文字に、筆勢の柔らかさと安定感が見られます。

意義..人生の晩年における到達点としての「心の静けさと自然との調和」が詠まれており、書家・静恵氏の境地が色濃くにじみ出た作品です。





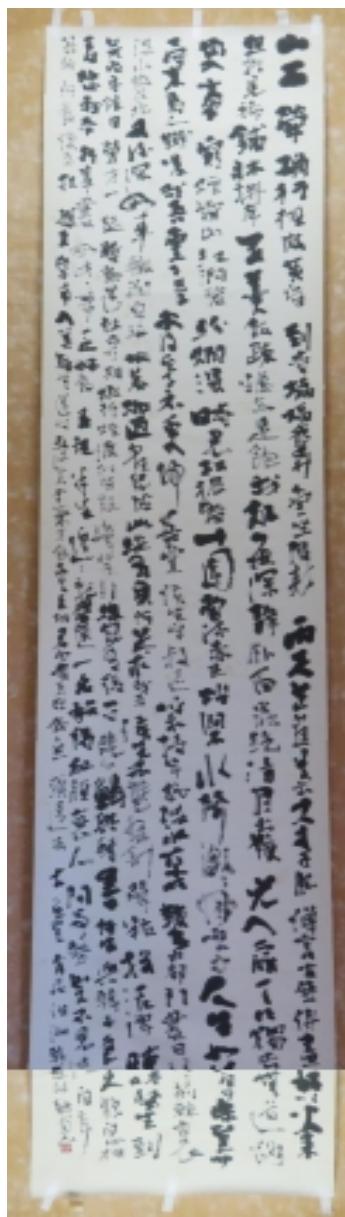
左側の署名・落款部解釈..

「紅葉山房」は静恵氏の号もしくは書斎名で、

「皓月五年 初夏」は創作・揮毫（きごう）の日付を表し、おそらく私的な元号と思われます。

書風と芸術的特徴

自然描写が視覚的で、絵画のような空間性を感じさせます。詩の終盤では時間帯の推移（春曉
→ 夕霞）による時間軸の流れも印象的。



※草書が非常に崩されており、以下は主旨抽出による意訳です。

青嶂（せいしよう）に雲を望み

禪院に香を焚き、鐘磬（しょうけい）の音響き

客來たつて茶を酌み交わし松下に鳥語、石上に苔滑らか

時に一偈（いちげ）を吟じて、心清らかに

世事を離れて、自然に帰する心境を描写

◆ 印章と署名

左下に「静恵」印と「詩日」と見える落款があり、書家・静恵氏の作品であることが明確です。

本作はとくに構成と感情の抑制が整った「旅の詩」であり、静かな余情と詩的深みを湛えた傑作といえます。

◆ 意訳（現代語訳）

山から吹き降ろす風が、旅先の楓の葉を寂しげに揺らしている。

甲子の年、春に旅先で旧友と再び出会つた。

船頭の話が終わると、水の底で魚や龍のようなものが動き出す。

夜の景色に灯火が浮かび、海から湿つた気が濃く漂つていて。

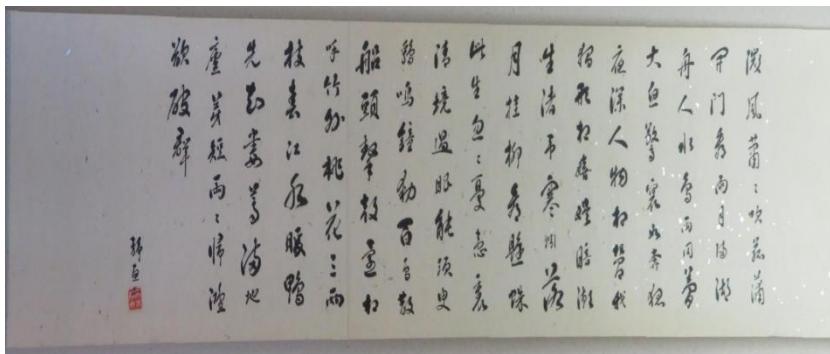
船の先はゆらゆら流れ、梅の花びらが散つていく。

橋のたもとには、名残惜しげな柳の緑がたなびいている。

月桂がほのかに香り、詩情がわき上がつてくる。

それでも、秋の音は、遠く故郷の松林に残つているようだ。

巻物には、端正な行書体で書かれた七言詩が記されています。



意訳（現代語訳）

墨跡　洞傳楓橋
林　亞山　宿　歸　家　り
秦江　間　陸　は　里
天　陽　・　室　上　風　や
移　地　陸　草　葉　も

夢がなくなつたからといって悲しむことはない。
ましてや、わたしの命などは一時の仮のもののようなもの。
百年の時は東へと流れ去る川のように速く過ぎる。

向　他　日　渡　経　う　緊

在　圓　心　重　い　本　雲

信　力　久　白　希　塚

え　も　・　き　い　き　陆　蔓

育　銀　城　若　日　斜

島　佐　北　望　京　華

陸　林　寔　ト　ミ　聲

澤　多　使　宿　往　月

杏　林　（学問の世界）

には先哲の風が漂う。

程　省　省　香　煙　連

伏　松　山　楊　粉　掠　桂

次　翁　詩　香　石　上　蕙

論語のよう中庸を語る百の詩も、

その妙理は心に伝えられ、書として残る。

舊　月　二　秋　か　あ

王侯の榮華も結局は空しく、

男児たる者、名をあげてこそ価値がある。

北の関山をいくつも越えて、

また西に向かうとすれば、そこに心の通じる人がいるだろうか？
龍や蛇のごとき力、雲や雨の変化も、何の益になるというのか。
だから、異郷で哀しげな楚の歌など詠まないようだ。

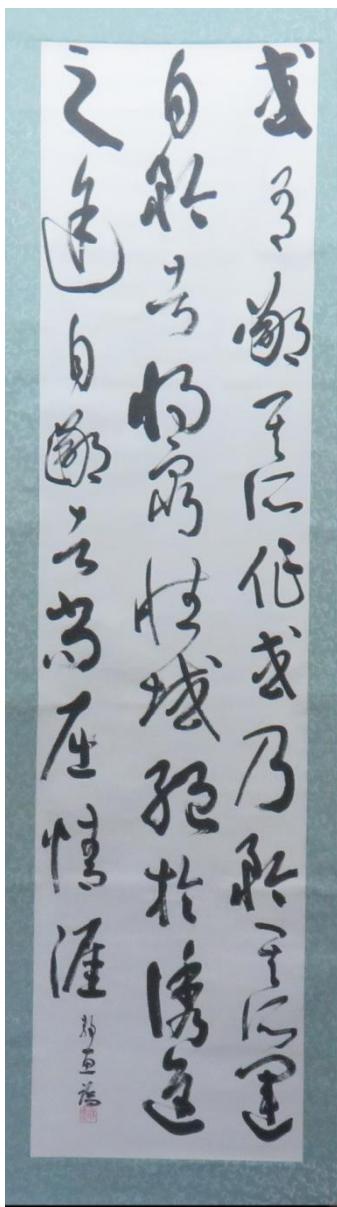
澤の芝や栄えある草と共に花開き、

杏林（学問の世界）には先哲の風が漂う。

宮中の礼儀も漢の国の風を引き継ぎ、

論語のように中庸を語る百の詩も、

その妙理は心に伝えられ、書として残る。



この文章は、『礼記』(らいき)の一篇「中庸」に出てくる句をもとにした文で、儒教的思想が色濃く出ています。

【書き下し文】

天の命（めい）をこれ性（せい）といい、性に率（したが）うをこれ道（みち）といい、道を修むるをこれ教（きょう）という。

廿九日至濟州遇周景遠新除行臺監察御史
自都下來酌酒于驛亭人以弔素求書于景遠
者甚衆而乞余書者全集殊不可當急登舟解籠
乃得休是晚至濟州北三十里重展此卷因題

薛直臨

「廿九日至濟州遇周景遠新除行臺監察御史
自都下來酌酒于驛亭人以弔素求書于景遠
者甚衆而乞余書者全集殊不可當急登舟解籠
乃得休是晚至濟州北三十里重展此卷因題」
は、唐の詩人 杜甫（とほ）の作

杜甫が長安（京）を出て、奉先（現在の陝西省蒲城県）へ向かう途中の感慨を、五百字の
長編詩として詠んだものです。

中庭地白樹棲鶴露
凝望桂花今夜月明人
不知秋思落誰家

中秋望月 王建

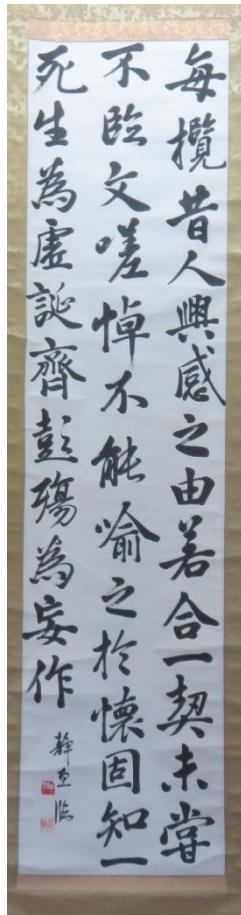
中庭は白く照らされ、木には鳥（からす）がとまっている。

冷たい露は音もなく、桂の花をしつとりと濡らしている。

今夜の月明かりは清らかで、誰もが見上げているけれど、
その秋の思いは、いつたい誰の家に降りかかるのだろうか。

解説
..

これは唐詩の風格をもつ抒情詩で、秋夜の静寂と孤独な情感を表現しています。
「秋思（しゅうし）」とは、秋になるとふと感じる物寂しい思いや郷愁のことです。
「不知秋思落誰家」という結句は、まさにその感傷を見事に結んでいます。



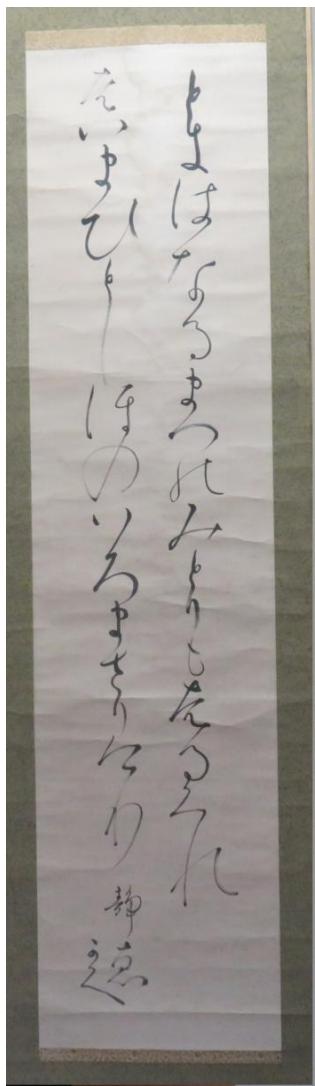
王羲之の蘭亭序 #28

解説

永和9年（353年）3月3日、王羲之は会稽郡の蘭亭で、謝安や孫綽ら41人の文人を集めて曲水の宴を催しました。川の上流から杯を流し、それが自分の前に来た時に詩を詠むという遊びが行われ、その際に詠まれた詩をまとめた詩集の序文として書かれたのが蘭亭序です。

書道の傑作

蘭亭序は、王羲之の書の中でも特に優れた作品とされ、行書の書風を確立したと評価されています。特に「之」の字の多様な表現は、書道における手本のようだとされています。



読み（ひらがな）..

ときはなる

まつの緑も春くれば

いまひとしほのいろまさりけり

藤原俊成

現代語訳..

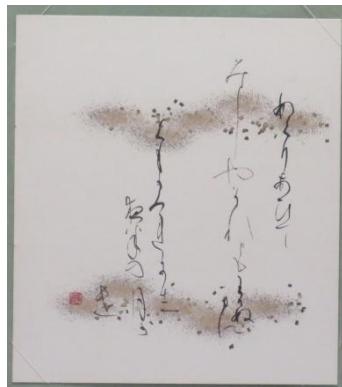
常磐（ときわ）に変わらぬ松の緑も、春が来ると、いつそう一層、色が濃く美しくなる」とよ。

めぐり逢いて

見しやそれともわかぬ間に

雲がくれにし
夜半（よは）の月かな

和泉式部



感想

この色紙作品は、和泉式部の情感豊かな歌の世界観を、極めて繊細に視覚化したものです。墨のじみと淡い金沙子のような点描は、まさに「雲がくれ」「夜半の月」といった夢さや移ろいを見事に表現しており、見る者的心にも余韻が残ります。



千歳まで
かぎれる松も
けふよりは
君にひかれて
よろず代や経む

大中臣能宣（おおなかとみよしのぶ）

通訳

千年までと寿命が限られる松も、今日からは、あなたに引かれて万年の命を保つでしょう。

逸話

この歌の作者・能宣は、親王殿下の前で、この歌を披露して、大変褒められたことを

帰宅して父に報告したところ、枕を投げられて叱られたとのこと。

「バカモノ！ 親王殿下に対してもここまで歌を詠んでしまつたら、今上陛下の前でどんな歌詠めばよいのだ！」と

*AIもこの色紙を読めなかつたのに、石神台のある人が、読み取り教えてくれました。

この画像に写っているのは、
日展（日本美術展覧会）の「入選

証」です。

安本静恵殿の作品「残照」が、平成3年度第23回日展書部第五科において入選したことを証明するも

のです。

この掛軸に書かれている詩は、中国北宋の大文豪蘇軾（そしょく／蘇東坡）による有名な詩「望江南・超然臺作（ちようぜんだいにてつくる）」の一節です。



■ 安本静恵氏の業績の中での位置づけ

過去にいただいた情報や他の表彰状などと照らし合わせると、安本氏は長年にわたって地域文化や書道に貢献されてきた方ですが、この日展入選は全国レベルの評価であり、まさにキヤリアの中でも**「金字塔」**と言える成果でしょう。

蘇軾詩（そしょくし）

壽山（じゅさん）、雲を断ちて塔層層たり。

一家の煙火、江東に映ず。

秋風吹いて西興に到り、横風、雨を吹きて楊斜に入る。
壯觀たる廬山（ろざん）、川吹きて晚潮（ばんちよう）、
雨過ぎて湖光、簾間に断たる。

積雨の声、顔上の時。

雲樹深くして江海に珠電（しゆでん）の光あり。

鐘声を侶と為し、帽粉を懸く。

頭に初日、桂銅の風あり。

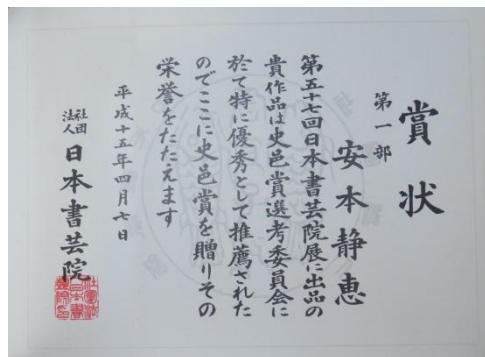
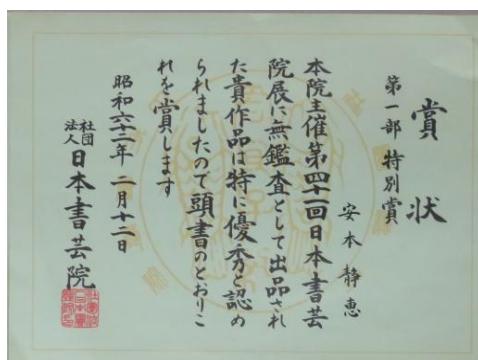
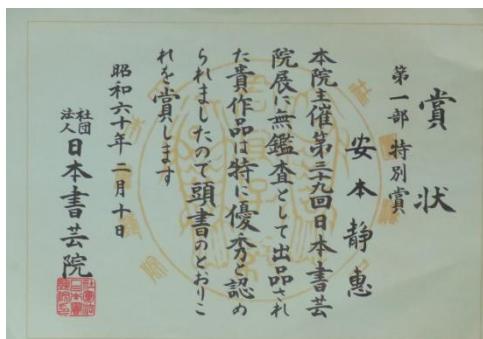
永恨を知る、山川の吹くを。

証す、野桃は笑みを含み、

竹は短しと難し。柳は自ら汀水を拂い清む。

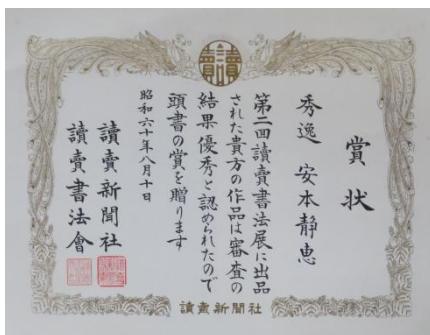
西崖に人家あり。

この作品は、書と詩の融合によって深い趣を生み出している点でも、日展にふさわしい内容だつたことがうかがえます。



安本静恵さんは、昭和60年（1985年）当時、62歳前後で活動させていたことになります。この年齢で日本書芸院で「無鑑査出品」「特別賞」を受賞されていたということは、すでにその時点での高い評価を確立させていた中堅から重鎮の書家だったと推測できます。その後も長く活動を続け、100歳を超えるまで芸術とともに生きられたことは、まさに敬服に値する書道人生です。

昭和六十年に読売書法展で「秀逸・頭書賞」と平成十四年に読売新聞社賞を受賞されています。昭和六十年は日本書芸院の受賞とダブル受賞です。





右：トルコ友好親善大使の盾（英語）

中央：Kunstkammer 2002 賞状（英語）

左：Kunstästhetik 2002 表彰盾（ドイツ語）

オーストリアにおける美術展「Kunstästhetik 2002」にて、安本静恵氏の芸術的才能と功績が特に優れていたとして授与されたものです。

総合評価

この3つの賞状・盾はすべて2002年に集中しており、安本静恵氏の芸術活動がこの年、ヨーロッパおよび中東において大きく評価されたことを物語っています。特に、プラハの国立美術館やオーストリアの美術機関、トルコ大使館といった国家レベルの文化機関から評価されている点は、非常に重要です。

母・静恵の書に係る若干の背景

生年月日　.. 大正十二年十月十四日　鳥取県鳥取市にて出生

この度は、小野司郎様並びに白崎勝様のご尽力により、母静恵の書の遺作を石神台ホームペー
ジのサーバーに登録することをご提案戴き、また個々の作品に解説まで頂戴戴きましたことに心
からお礼申し上げます。

書道に関しましては、女学校時代から関心があつたようで、終生愛用いたしておりましたのは、
母が女学校時代に頂いた硯箱で、生涯大切にしておりました。

年齢を重ねましても書に関する関心は高く、NBB の書道講座などもよく拝聴していました。
講師陣の中でもとりわけその書風に惹かれた書家が後の師匠であった今井凌雪（いまいりょうせ
つ）先生でした。結果的には、師の門をたたき弟子として精進することになりました。

このように今井先生の弟子になつて充実した書道三昧の道を歩むことができたことにつきまし
ては、充分満足していたのではないかと存じます。べつな言葉で申し上げますと、今井先生に対
する自身の眼力に狂いはなかつたと申しますか、自負のような思いがあつたのではないかと思料
致しております・・・

母は、自身が体験してきた書道の楽しさや奥深さを皆様にも是非お伝えして、それらを皆様と
共有したいという強い思い入れがあり、書道に関して自分が持ち合わせている持ち物をすべて明
らかにして皆様にお伝えしたかつたのはのではないかと存じています。（令和七年六月吉日　徹）

今井凌雪先生の参考資料

(以下は Wikipedia より抜粋)

今井凌雪（いまい りょうせつ、本名：今井潤一（いまいじゅんいち） - 1922年12月19日～2011年7月26日）は、日本の書家。筑波大学名誉教授。書法研究雪心会会長。「読売書法会」常務理事。社団法人「日展」参事。社団法人「日本書芸院」名誉顧問。「国際書道連盟」顧問

経歴 「編集」

奈良県奈良市生まれ。郡山中学（現奈良県立郡山高等学校）、天理語学専門学校（現天理大学外国語学部）卒業後、「駿々堂入社」。1949年立命館大学法文学部経済学科卒業。中谷釜雙、辻本史邑に師事。東京教育大学、筑波大学、大東文化大学で教授。大東文化大学書道文化センター所長を歴任（1991年まで）した。

中国では西冷印社名誉社員、浙江中国美術学院脚韻教授、上海復旦大学兼職教授を歴任し高い評価を得る。テレビにおいては、NHK 教育テレビ「夫人百科」「NHK 趣味講座 書道に親しむ」（1983年4月-9月）「NHK 趣味講座 書道に親しむ一行書草書」（1985年10月-1986年3月）の講師を務める。朝日新聞社主催「現代書道」「十人展」のメンバードもあった。

黒沢明監督作品「乱」（1985年）「夢」（1990年）「まあだだよ」（1993年）の題字を担当したことでも知られる。2002年には映画「阿弥陀堂だより」の題字も、また岩波書店の新日本古典文学体系の題字も担当した。2011年7月26日肺臓がんのため死去。88歳。

以上

発行日 編集
二〇一二五年七月一〇日 白崎勝